

イースターメッセージ

イエスの平和 (その2)

—イエスの受難と復活の視点から—

廣石 望

(日本基督教団代々木上原教会担任教師、  
立教大学文学部キリスト教学科教授)

1月19日、キリスト教基盤研究室主催第4回聖書に親しむシリーズ「イエスの平和」(その2)が東京YWCA会館およびオンラインにて開催されました。講師の廣石望さんにイースターメッセージとして要旨をご寄稿いただきました。

戦争を行う者は、勝利こそが平和への道だと考えているのではないのでしょうか。古代ローマの軍事学者ウェグティウスは「汝平和を欲さば、戦いへの備えをせよ」と言いました。帝政期の「ローマの平和 pax Romana」の理念には、世界大の平和を創出するために、あらゆる戦争に終わりをもたらず大戦争に勝利しなければならない、という含みがありました。平和は戦争の反対のものであると同時に、戦争の正当化でもあったのです。

他方で、哲学者インマヌエル・カントは「理性は戦争を禁じており、平和は私たちの義務である」、「平和は諸民族相互の契約を通して設立される」と論じました(『永遠平和のために』1795年)。現代の平和を愛する人々も、この理解に共感するのではないのでしょうか。しかしながら「平和の実現は私たちの義務だ」という、人類の生死を決するほどの定言命法は、戦争の現実を前にするとき、私たちをひどくがっかりさせます。戦争を終わらせる契約という平和理解は、戦争概念に深く依拠しています。

「戦争」という概念に依拠しない、平和理解はありうるのでしょうか。じつはギリシア・ローマ世界には、かつての黄金時代には「永遠の平和」があった、つまり戦争をペアとしない平和があった、という神話的な観念があります。少しそれに似て、聖書で用いられる「平和」は戦争と結びつくことがずっと少ないです。

ヘブライ語「シャローム」は、何かを完全ならしめる、まったくする、

あるいは健康にするという意味の動詞から派生しました。神がギデオンに「君に平和。君は恐れるな。君は死なない」と言うとき（士師記 6:23）、平和の挨拶を通して平和が分配され、挨拶する者は平和なふるまいを自らに義務づけ、平和を約束された者はそれに信頼できます。「私の骨には平和がない、私の罪のゆえに」（詩編 38:4）と言われるとき、平和とは健康な生に属するすべてを包摂する救われた状態です。神が「私に平和をなせ（私と和解せよ）」と言うのは（イザヤ書 27:5）、神との関係が疎外されるとき、人は自分自身に対しても平和でいられないからです。使徒パウロが「君たちに恵みが、そして平和が、私たちの父なる神と主イエス・キリストから」と挨拶するとき（ローマの信徒への手紙 1:7）、平和は私たちの努力目標でなく、すでに神によって実現されています。

ヨハネ福音書の顕現物語では、復活したイエスは、恐れゆえに屋内に立てこもっていた弟子たちの真ん中に立ち、「君たちに平和」と挨拶して、傷跡を見せました。そしてもう一度「君たちに平和」と挨拶して、「私も君たちを遣わす」と言い、息を吹きかけつつ「聖霊を受けとれ」と言います（ヨハネ 20:19-23）。復活のキリストの身体に残る傷跡は、暴力の破壊力がすでに克服されていることのしるしです。また聖霊の賦与は、「罪の赦し」という新しい、また根源的な現実を告げるためです。この平和の挨拶が、私たちの生に使命としての意味を与えたいと思います。